

令和 2 年 7 月 11 日現在

機関番号：32661

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11745

研究課題名(和文) 早産児を育てる父親の育児支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of parenting support program for fathers who raise premature infant

研究代表者

中富 利香 (Nakatomi, Rika)

東邦大学・医学部・博士研究員

研究者番号：20347066

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：NICUにおける父親の特性として、早産児を出産した罪悪感を抱く妻に配慮するため妻が主体となれる育児環境を整える傾向にあった。また、妻と医療者間の育児支援体制が父親の孤立感と無力感を抱かせていた。その一方で父親は自分自身が主体的に育児を実践し父親の役割を確立したい欲求も持ち合わせていた。同時に子どもの成長発達への心配や不安は、子どもとの直接的な関わりから得られる子どもの反応と、類似する家族の育児ブログからの情報により軽減していた。しかし退院後の先の見通しが立たない不安感にストレスも感じていた。以上から子どもの今後の発達と生活への見通しを持って、妻と共同できる育児支援プログラムが必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

早産児の父親が育児を行う上で、妻が子どもに抱く罪悪感や医療者の母親中心の育児支援が影響を与えている事が明らかとなった。この事は医療者がNICUに子どもの入院初期の段階から父親を支援する方略の一助となり得る。また、父親に与える情報は医療者からの専門的な知識だけではなく、父親が子どもと直接関わる事から得られる体験を情報の一つと捉え与える支援は、父子関係を促進させる事として意義があると考えられる。同時に、今後の子どもの発達や生活のある程度イメージできるよう支援する事は退院後の父親のストレス緩和、および家族全体の機能を安定させる事にも繋がる。早産児を出産した家族への支援モデルとしての提示も可能だと考える。

研究成果の概要(英文)：The characteristics of the fathers who parenting the preterm infant were to consider the guilt feeling of mother gave birth to preterm infant, and coordinate the childcare environment that mother-first. Also, the parenting support system by cooperation of the mother and the medical staff in NICU made fathers feel being alone and help-less. On the other hand, the fathers had the desire to be directly involved in childcare independently, and hope to establish paternal role. The anxiety of the child's growth and development was solved with feel safe by the child's reaction when fathers relate to the child, also helped with family parenting blog of preterm infant. However, the fathers feel uneasy about family life after discharge with no prospect. It is necessary that the parenting support program of fathers of preterm infant have the prospect about child's growth and development in the future, also give the childcare system which can be jointly with fathers and mother.

研究分野：小児看護学

キーワード：早産児 父親 育児支援プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の新生児医療は目覚ましく、早産・低出生体重児や重症疾患をもつ新生児の救命率が進む一方、早産・低出生体重児の出生率も増加している。その結果、高度で複雑な医療的ケアが必要となり、入院の長期化や親の育児不安も生じてきた。NICUは新生児の救命や治療の場であるとともに子どもの発達や育児支援の場でもあるという視点が置かれ、Family centered care(FCC)が新生児医療において提唱され、家族中心の看護が浸透してきた。

FCCとは米国で提唱された理念であり、家族と医療者とのパートナーシップを基盤とし家族中心の看護を提供していくことにある。米国ではこのFCCにより家族中心の看護が発展してきた。我が国のNICUにおいてもFCCの理念のもとに家族中心のケアが展開され始めてきている。しかし、国内外ともに家族ケアの対象の殆どは頻りに子どもの面会にくる母親であり、母親と医療者のパートナーシップを基盤に母子関係を育むケアが中心となって展開されている。

今日では新生児医療においてのみではなく、父親の育児参加の必要性が核家族化や共働きなどの社会的背景からも高まっている。また、ワークライフバランスの提唱とともに、自ら子育てに積極的に参加したいと望む父親も増え、厚生労働省では父親を支援するイクメンプロジェクトをH22年より開始している。

早産児の父親についての先行研究では、国内外ともに早産児の父親のストレスや不安、育児体験を記述する報告が蓄積され始めている。近年、国外では早産児の父親が必要とする支援内容として、母親と同様のピアサポート体制や早産児の育児についての講習会の開催の意義を提言している。しかし、これらは早産児の父親の現状を明らかにしたものにとどまり、具体的な支援の検討や父親を対象とした支援プログラム等の取り組みに至った研究はみられていない。更に、国内外ともにFCCの理念のもと父親と医療者がパートナーシップを図り育児支援の取り組みを行った報告は殆どみられておらず、医療者も父親への関わり方や支援を模索しているのが現状であると考える。

早産児を出生した家族は満期産児を出生した家族とは明らかに出生経緯と育児環境が異なる。早産児は出生と同時にNICUに収容となり、母親は加療のため入院となる。従って、最初に直接子どもと関わる父親が家族成員として重要な役割を担っていく。そのため、昨今では母親のみでなく父親への育児支援について重要視されるようになってきた。また同時に、父親のもつ不安やストレスなど父親自身に対するケアが殆どされてきていない事も着目されている。

早産児の父親に必要な支援や育児指導をどのように行うかについては先行研究でも課題として挙げられており、早産児の父親への育児支援に関する研究は父親のみならず医療機関や自治体においても必要とされている。

本研究は、今後の周産期医療施設や各自治体の子育て支援における早産児の父親への新たな育児支援モデルを提示する研究として位置づけられる。

2. 研究の目的

本研究は早産児を出生した家族において父親に必要な育児支援プログラムを開発することを目的とし、以下を明らかにする。

- .NICU入院時期から退院1カ月後に至る父子関係の形成プロセスを明らかにする。
- .父親がどのように妻と連携し育児を展開していくのかを明らかにする。
- .父親が必要とする情報や資源を明らかにする。
- .FCCの理念を取り入れた父親への育児支援プログラムの構造を検討する。

3. 研究の方法

研究方法：早産児の父親へのインタビュー調査、及び質問紙調査

対象者：出生体重1500g未満の早産・極低出生体重児の父親

調査方法：.早産児の入院中および退院1か月後の2回、父親にインタビュー調査を行う。父親がどのように子どもを捉え、どのような事が父親にとって助けになったのか、について半構成的面接を行う。インタビュー人数は20名とする。
.インタビュー内容の結果から質問紙調査票を作成し、各研究協力施設の総合母子医療センターにて対象となる早産児の父親300名を予定し質問紙調査を行う。
.質問紙調査票の結果からFCCの理念を取り入れた育児支援プログラムを開発する。

分析方法：.インタビュー調査から得られたデータをコード化し、「父子関係構築のプロセス、構築の要因となるもの」「夫婦が連携して行う育児」「父親が収集する情報の内容と情報源」「父親が望む支援内容」について質的に分析し、カテゴリー化する。
.インタビュー調査でカテゴリー化した項目をもとに作成した質問紙調査票から得られたデータを項目別に単純集計し、統計学的解析を行う。
.解析結果から、早産児の父親の父子関係の形成プロセスおよび育児における夫婦の連携の在り方、父親のニーズを検討し、早産児の父親への育児支援プログラムに必要な枠組みを作成する

4. 研究成果

・ 早産児の父親の父子関係形成プロセス

早産児のNICU入院から退院に至るまでの期間

父親は子どもの出生直後から集中度を高め、直接子どもを観察することや触れることから日々の子どもの変化を感じ取っていた。その詳細な変化から危機を乗り越える子どもへの愛おしさが芽生え、その愛おしさから早産児である子どもなりの成長発達に関心を持ち始めていた。子どもの成長発達を喜ぶ一方で、子どもの成長発達が今後どのようなプロセスを辿ることになるのかの不安も感じ、合併症や障害が出る可能性も常に念頭におきながら子どもと関わっていた。それは何かあった場合の対処法について考えることにも繋がっていた。

また、父親は直接子どもを観察することや触れることから満期産児の子どもと異なる身体の小ささや脆弱性を特徴として捉えていた。その上で治療行為やケアに対する子どもの反応に意味づけをし、理解しようとしていた。同時に子どもへの触れ方やかわり方を変化させていた。このような相互作用から段階的に父親は愛着とともに親としての自覚や責任を感じるようになっていった。親としての自覚や責任は、「面会に行くことが親の責任だ」としていること、また「経済的な面を強力にしておくこと」などを挙げていた。

更に、退院日が近づくにつれ父親としての育児における役割を意識し始めていた。その意識から他の早産児の父親への興味や育児ブログを SNS 等で閲覧する行動も挙げられていた。しかし NICU 施設内では母親と看護師のパートナーシップを基盤とした育児支援や退院指導が展開されていることにより、父親は「妻と看護師の間に入りづらい」「居場所がない」等の孤独感や無力感も同時に感じていた。医療者から受ける子どもの病状や発達についての説明は情報の1つとして捉え、子どもとの直接的な関わりから得た情報を中心に父子関係を形成していた。

早産児の父親は直接子どもと関わることで子どもを受け止め、愛着を形成し親としての自覚や責任感から役割行動を模索していた。しかし NICU 施設内においては母親と医療者のパートナーシップ体制からそれらの自覚や責任感を発展させ親役割を確立させることに困難が生じていると考えられる。

早産児の退院から退院1か月後までの期間

子どもが退院すると父親は新たに子どもを加えた家族成員による生活を開始することになる。NICU 入院中に挙げていた子どもの今後の発達や合併症などの不安や心配であるという回答より、沐浴や授乳、おむつ交換等の育児そのもの大変さの回答が上回っていた。その大変さを「世話が出来る苦労」と表現していた。また、NICU 入院中に感じていた無力感や孤独感は消失していた。退院後は父親が主体的に関われる場面が増え、夫婦と連携して子育てを実践する環境へと変化したことから育児の大変さだけではなく満足感や充実感も伴ったと考えられる。

発達に関する不安や心配は消失したわけではなく、1カ月健診まで継続していた。不安や心配や不安の内容は「障害が出てくるのか否か」「今後の発達の状況」「Catch up の時期」がNICU入院中から一貫して挙がっている。しかし、その不安や心配は軽減していた。理由として「子どもの日々の成長発達を間近に見ることで何となく安心する」という回答が挙がっていた。更に1カ月健診での医師からの説明や看護師からの言葉かけにより、「一区切ついた」という回答があり、1カ月健診は父親にとって最初のターニングポイントとなっていると考えられる。

父親としての自覚は日々増していき、その自覚から父親が親としての役割を更に具体的に模索していた。「近隣の父子の様子を観察し、役割をイメージする」「仕事を更に頑張り経済基盤を作る」「子育てと仕事の両立」「妻子をサポートする」という回答があったが、同時に「経済以外の何かが役割としてあるはず」と回答するものの、具体的な内容は挙がっていなかった。退院後は主体的に育児に関わる事を欲求しつつも何をしてよいのか分からず、また「妻の早産児を産んだ罪感に配慮するため妻の育児を優先する」という思いもあるため経済基盤を作ることや妻子をサポートすることに意識をおいていた。

・ 夫婦の連携の在り方

早産児のNICU入院から退院に至るまでの期間

父親は妻が抱えている早産児を出産した罪悪感や母体の変化への気遣いから「妻を支える存在」「妻の育児観を優先」という回答があった。また、この気遣いは「面会に行く」と既に妻と看護師が連携して指導が開始されているので入りづらい」「居場所がない」「妻から色々聞けば済む」など、医師や看護師が母親と子どもとの関係性を中心に育児支援を実践していることも影響していた。

早産児の退院から退院1か月後までの期間

退院後も妻との連携の在り方に変化は見られなかった。

「妻を支える存在」「妻の育児観を優先させる」の2項目の回答が引き続きあった

退院後も引き続き妻の身体的変化や、妻の抱く罪悪感への配慮から妻の言動や行動を

見極めた上で父親自身がとる育児行動を調整していた。「妻の信念を尊重する」「その都度話し合う」という回答もあり、NICU 入院中と同じく妻の育児観を優先させる行動を引き続きとっていた。その一方で父親は「今後は父親にしか出来ない事があるはず」「妻に代わる役割はあるはず」という回答もあった。しかし妻の言動や行動が父親の育児行動や役割に影響していると考えられる。

父親が必要とする情報や資源と収集方法

早産児の NICU 入院中から退院に至るまでの期間

父親が情報源とする対象は医師、看護師の他、妻、SNS の育児ブログとする回答であった。面会時に医師からは子どもの病状や今後の経過について、看護師からは子どもの日常の様子、特に哺乳状況や体重について情報を得ていた。医師や看護師からの声かけのタイミングは「面会時の最初と途中と帰る時の 3 回程度が良い」としていた。また、仕事のため頻りに面会に来られない事情から、「妻からの情報を待つ」という回答もあった。しかし、父親が直接医師や看護師に聞きたい事を妻に代わりに聞いてもらうという事は避けていた。その理由として「妻に負担をかけたくない」としていた。

医療者と妻以外に SNS の育児ブログから情報を得ていたが、その内容は「～だったけど助かった。～だったけど乗り越えられた。などの前向きな情報だけを拾った」「自分の不安が解消される具体的な育児ブログが必要だった」という回答があった。また専門病院や専門医師等の HP は閲覧していなかった。その理由に「そういう HP があることは知らなかったし、発想もなかった」「医師や看護師の説明だけでなく、同じく早産児を産んだ家族の話を知るほうが具体的なイメージが付きやすいから」としていた。

また、退院日が近づいた時期に父親は「他の父親がどうしているか気になる」という回答もあった。

早産児の退院から退院 1 か月後までの期間

退院後は 1 か月健診までは医療者へ情報を求めることはしていなかった。「知りたい情報については今すぐ必要な事以外は書きとめておき、1 か月健診時に聞く」「SNS の育児ブログで似たような質問を見つけ情報を得る」と回答していた。退院 1 か月後も同様に専門病院や専門医師などの HP は活用していなかった。理由も NICU 入院中の時期と同様であった。

父親は NICU 施設がフォローアップの 1 つとして開催している退院後の早産児と親を対象とした親子教室等は他の早産児の様子や家族との交流から情報を得る事が出来る場でもあることを認識しているが、実際に参加した父親は 1 名であった。仕事が休めたという理由であった。他の父親は「日程が合わず、行けるのであれば 1 回は参加してみたい」と回答していた。

また、「父親同士の交流の場があってもよいのでは」「他の父親とネット上でもよいので交流してみたい」「団塊世代ではないから育児参加は興味があると思う」「商談先の父も同時期の出産で、情報交換をしている。楽になった」という回答もあった。

更に「女性のためか、妻は交友関係が広いので妻が持っている情報を共有している」という回答もあった。

FCC の理念を取り入れた父親への育児支援プログラムの構造の検討

早産児の父親は父親主体の育児を求める一方で、早産児を出産した妻が抱く罪悪感に配慮するため妻が主体の育児環境を提供するというアンビバレントな状態が育児展開の中心構造となっていた。アンビバレントな状態は父親の不全感にも影響すると考えられる。医療者は FCC の理念を基本としたケアを試みているが、実際は父親への「尊重」や「協働」の項目が十分に機能していない可能性がある。

また、父親の必要とする情報は専門的な知識よりも生活に密着し、かつ具体的にイメージできる内容であることが明らかになった。更に退院時にあたり今後の生活と子どもの発達プロセスがある程度予想できる情報を切望していた。

以上の特性を組み入れたプログラムが必要であり、また可能な限りにおいて父親同士の交流が持てるような場の提供も支援として重要である。

今後も引き続き対象数を重ね、具体的なプログラムの作成と介入を試みることを課題とした。

< 引用文献 >

Marie-Josée, Martel, Isabelle Milette, Linda Bell, et al: Establishment of the Relationship Between Fathers and Premature Infants in Neonatal Units. *Advances in Neonatal Care*. 2016;16(5);390-398.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中富利香
2. 発表標題 早産児を出産した家族における父親の育児参加の特徴
3. 学会等名 第27回新生児看護学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	関森 みゆき (Sekimori Miyuki) (00313867)	武蔵野大学・看護学部・教授 (32680)	
研究分担者	市川 正人 (Ichikawa Masato) (20513873)	北海道科学大学・保健医療学部・准教授 (30108)	
連携研究者	高田 哲 (Takada Satoshi) (10216658)	神戸大学・保健学研究科・名誉教授 (14501)	